

大学英語教科書を斬る！：その傾向と分析 同志社大学の事例を中心に*

山 内 信 幸

．はじめに

大学改革の名の下に、それぞれの大学では、教育のソフト面でFD（ファカルティ・ディベロップメント）などの取り組みがなされつつあるが、まだ緒についたばかりの感は否めない。その一方で、時代の要請に合わせて、カリキュラム改訂やその弾力的運用など、さまざまな試みを展開する必要に迫られてきている。現行カリキュラムの見直しの際に、その全体的な枠組みや履修方法などに関する検討はなされていても、過年度の教科書の出版および採用に関する量的分析をカリキュラム改訂にどう活かすかという視点は見過ごされてきたのが現状であろう。

本稿では、過年度5カ年（2000年度～2004年度）を対象として、日本における大学英語教科書の出版状況を分析し、出版業界の最近の動向を概観することによって、出版業界の経営戦略と実際の教科書採用状況との相関関係をあきらかにする。とりわけ、同志社大学における採用状況を事例として、その傾向ならびに分析をとおして、言語文化教育研究センター（以下、言文センター）第二部会（英語）における今後の英語カリキュラムの改訂ならびに統一テキストの作成のために、ささやかな貢献をなすことを目指すものである。

．同志社大学の英語カリキュラムの変遷

まず、具体的な大学英語教科書の分析にはいる前に、同志社大学の英語カリキュラムについて、言文センター発足当時まで遡及し、カリキュラム構成

と運営について、当時から現在にいたるまで概観してみよう。

1991年7月になされた大学設置基準の大綱化にともない、本学の神・文・法・経済・商・工の各学部においてカリキュラム改革が進められていくなかで、1993年4月に、外国語および言語文化・外国文化に関する教育・研究をより効率的に、より高度に、より多角的に展開するために、「英語」および「二外」の教員による新組織として、「言文センター」が発足した。ちょうどこの時期と前後して、外国語、とりわけ、英語カリキュラムについても、大胆な改訂が施されることになった。

まず、言文センター発足前の1992年度に実施されていた旧英語カリキュラムを概観してみよう。¹ 大枠としては、入学以前に修めた英語の基礎知識と理解力に基づく一段高い語学力を修得するため、英語の思想的、文化的、社会的背景の理解を深める一方で、「読む」・「書く」・「聞く」・「話す」という実際の運用能力を訓練し、向上させる目的で、カリキュラムが構成された。

具体的には、1年次では、異文化理解の視点から、ストーリーやエッセイを読み、英語という言葉のもつ多様な特質への理解を深め、英文の主旨・大意を把握し、意味・内容を的確にとらえる読解力を養成するクラス（英語A）とエッセイを中心に学生の学部専攻を配慮したテキストを用いて、論理的、抽象的な表現の意味・内容を正確にとらえる訓練だけでなく、さまざまな分野の基礎的背景の理解を目指すクラス（英語B）が開設された。

2年次では、英語A・Bをふまえ、内容・表現ともにより高度のテキストを用いて、読解力の向上を主眼としたクラス（英語C）と、いわゆる「4技能」を集中的に学習させるため、講読、口語英語、オーディオ英語、英文法、英作文に分け、学生が自由に選択できるクラス（英語D）が開講された。（なお、1990年度からは、英語Dにおいて、当時としては先駆的なコンピュータを利用したCAIクラスが開始された。）

さらに、3・4年次を対象に、種々のメディアによる英語の報道、談話、論説、講演などを理解し、英語による情報の受信能力を高めるとともに、英語圏を中心とする海外の文化や社会に対し、理解を深めるためのクラス（英語E：特講 英語文化事情）と種々の国際的分野や状況において、英語を書

き、話すという発信能力を高めるためのクラス（英語F：特講 現代英語表現法）が提供された。

1993年4月の言文センター発足を機に、第二部会でも、現行カリキュラムの自主的な見直しおよび検討の結果として、新しいカリキュラムを軌道に乗せることとなった。

新英語カリキュラムの主な特徴として、従来どおり、有機的に組み立てられ、全学部生を対象とし、しかも、原則として、選択制を導入する、従来の教養を高める側面に加えて、異文化理解と実践的な側面を大胆に導入する、科目名を明示し、その教科内容を受講生にわかりやすく提示する、科目の運用方法を工夫し、多様化を図ることなどが挙げられる。² 具体的には、以下のような科目が提供されることとなった。（なお、科目名については、1993年度はカリキュラム改訂の過渡期ということもあって、旧科目名との併記の形など、各学部間で若干の異同が見られる結果となった。）

1年次設置科目として、田辺校地に「英語文化事情（英語A）」および「英語講読（英語B）」が開設され、2年次以降の多様なクラス学習の基盤となる語学力を養成し、異文化理解を深めるためのコア・カリキュラムとして位置づけられた。学生は、各自の関心と意欲に応じて、原則として、各学部指定内でクラスを選択し、履修できることとなった。（なお、1993年度では、商学部のみが、「英語講読」に関して学部指定制を採用した。）

「英語文化事情」では、従来の訳読中心の授業とは異なり、コミュニケーションと異文化理解への手段としての英語学習に重点を置き、聴解力を中心に、直読直解力、大意把握力などを養うとともに、理解した内容について各自の意見をまとめ、発表する能力を養うことを目指した。多様な教授法によって授業は展開され、とりわけ、開講クラス数の1/3にあたるクラス（タイプ1）で、定員30名、ネイティブ・スピーカーと日本人による、前期・後期交代制のクラスが特色ある試みの1つといえよう。その他のクラス（タイプ2）は、40名定員で、日本人が担当した。

「英語講読」は、1992年度より英語Bで実施されているものとその趣旨および運営方法はほぼ同じで、定員40名で提供された。

2年次（以上）設置科目として、田辺校地に「イングリッシュ・セミナー

（英語C）」および「イングリッシュ・ワークショップ（英語D）」が開設された。両科目に複数のコースを設け、それぞれに多様なクラスが学部横断的に設置され、学生は、それぞれの科目から1コースを選択し、履修することとなった。

「イングリッシュ・セミナー」は、英語のテキストを読むことを前提としながら、講義や演習を含めた教授法を導入し、異文化へのより高度な知識を深めることを目的とした。具体的には、「言語コース」、「コミュニケーションコース」、「英米文化コース」、「地域研究コース」、「科学コース」の5つのコースが設置され、47名定員で提供された。

「イングリッシュ・ワークショップ」は、「4技能」を重視し、学習者の英語力の一層の充実を図り、それをとおして異文化理解を深めることを目指すものとして位置づけられた。具体的には、「リスニングコース（定員40名）」、「スピーキングコース（定員20名）」、「リーディングコース（定員40名）」、「ライティングコース（定員30名）」、「CAIコース（定員25名）」、「スペシャル・イングリッシュコース（定員30名）」が提供された。

また、1・2年次設置科目として、田辺校地で1・2年次生を対象に、週2コマのインテンシヴクラスとして、高度な英語「4技能」の養成を目指し、「留学生の送り出し」をその目標の1つとする「イングリッシュ・プラクティクムI（アドヴァンスト）・II（留学準備）」が開設されたのは、特筆に値しよう。この科目は、オプションな科目とし、受講資格を、前者は、TOEFL, TOEIC：450点、英検：準1級以上、後者は、TOEFL：500点以上と定め、高度な英語能力と強い学習意欲を備えた学生の要求にも応えられるように配慮されたものである。

3・4年次設置科目として、今出川校地において、旧来の英語E（特講 英語文化事情）および英語F（特講 現代英語表現法）とその趣旨ならびに運営方法はほぼ同じクラスで、名称を「英語文化事情 上級（定員40名）」および「現代英語表現法 上級（定員20名）」に変更したクラスが、全学部に選択制で提供された。

また、新設科目では、「イングリッシュ・セミナー」を発展させた科目として、「言語文化研究（表現文化論）（言語論）（地域文化論）（英米文化

論)」の4種目が、1クラス40名定員で提供され、3年次生以上で、能力と意欲のある学生に英語学習の道を開くものとして位置づけられることとなった。

以後、2001年度までは、開講クラス数に若干の異同はあるものの、1993年度の英語カリキュラムを踏襲することとなった。その間、新学部構想などに精力を傾注せざるをえないこともあり、また、1998年度にセメスター制度が導入されたのにともない、半期科目として、たとえば、「英語文化事情1・2」というように、クラス名の変更がおこなわれたが、³ 実質的なカリキュラムの見直しは2002年度まで待たなければならなかった。

2002年度の英語カリキュラム改訂は、従来からのカリキュラムの点検・見直し作業の一環としておこなわれたものであるが、後に出された経済学部からの協力要請に应运、経済学部用英語カリキュラムを将来的に先取りする形で大幅に変更すること⁴に連動して、実施されたものであった。従来の英語カリキュラムの基本的性格づけは踏襲するものの、国際語としての英語の位置づけ、学生の基礎的語学力の変化、大学英語教育への多様な要求に鑑み、教育効果を一層高め、学生の語学力のさらなる向上を目指して、カリキュラムの趣旨、コース区分、指導要領に若干の変更を加えることとなった。⁵

表1 2002年度英語カリキュラム概要

	科目名	内 容	定 員	履 修 方 法
1 年 次 生 対 象	英語文化事情1・2		35名	選択制(神・法・商) 学部指定制(文・工・経) 経済学部習熟度別クラス編成
	英語講読1・2		経以外・45名 経・30名	学部指定内クラス選択制(神・法) 学部指定制(文・商・経・工)
2 年 次 生 対 象	イングリッシュ・ セミナー1・2	以下から1種目選択 ・人文 ・社会 ・自然	各クラス45名	選択制
	イングリッシュ・ セミナー3	(集中型)*	45名	
	イングリッシュ・ ワークショップ1・2	以下から1種目選択 ・リスニング (ただし、LLクラスあり・定員36名)	45名	選択制
		・リーディング	45名	
		・ライティング	25名	
		・スピーキング	25名	
		・スペシャル・イングリッシュ (ただし、CAIを組み込むクラスあり・定員25名)	30名	

	イングリッシュ・ワークショップⅢ	(集中型) *	36名	
対象 1・2 年次生	イングリッシュ・プラクティクムⅠ	・アドヴァンスト *	各クラス30名	選択制
	イングリッシュ・プラクティクムⅡ	・留学準備 *	各クラス30名	
対象 3・4 年次生	英語文化事情・上級	(文化事情、講読、セミナー、ワークショップをすべて履修した者、あるいは、プラクティクムⅠかⅡを履修した者) *	40名	選択制
	現代英語表現法		20名	
	言語文化研究 1・2	・表現文化論 ・言語論 ・地域文化論	各クラス40名	選択制

* は、同一担当者による週 2 回の授業形態である。(春学期あるいは秋学期完結)

まず、カリキュラム改訂の骨子は、学生に対する説明責任を果たし、さらに、社会全体からの多様な要求にも応えるために、 いずれの科目においても、授業の目標と内容を明示し、英語の受信能力だけでなく、発信能力にも配慮した指導をおこなうこと、 十分な課題と動機づけを与えて、クラス外での学習 (在宅学習など) の充実を促すことを目指すものであった。

具体的には、コース区分の変更にともなって、「イングリッシュ・セミナー」は、従来の 5 コースを「人文」・「社会」・「自然」の 3 コースに集約し、「イングリッシュ・ワークショップ」には、「リスニングコース」、「リーディングコース」、「ライティングコース」、「スピーキングコース」、「スペシャル・イングリッシュコース」を設置し、CAIについては、「スペシャル・イングリッシュコース」に組み込むこととした。

また、指導内容としては、「英語文化事情」において、とりわけ、リスニングとパラグラフ・ライティングの要素を加味すること、「英語講読」と「イングリッシュ・セミナー」においては、語彙力の増強を指導すること、さらに、「イングリッシュ・ワークショップ (スピーキング)」においては、特に、プレゼンテーションの能力を養うことを指導することが確認された。

さらに、シラバス作成にあたって、学生の科目選択の便を図り、成績評価の基準を明確にするなど、従来にもまして、詳細な記述を求めることになった。

．大学英語教科書出版業界の最近の動向

本節では、比較的出版部数の多い英語教科書出版社を任意に抽出し、過年度5カ年（2000年度～2004年度）にわたり、その刊行点数の実績および傾向の分析を試みる。⁶

まず、各出版社別の刊行数の推移は、以下の表2に示すとおりである。

表2 出版社別刊行数の推移

	2000	2001	2002	2003	2004	平均
朝日出版社	14	19	15	13	12	14.6
英潮社	6	9	9	4	5	6.6
英宝社	14	14	7	9	10	10.8
金星堂	18	19	15	15	13	16.0
三修社	15	11	11	12	8	11.4
松柏社	16	14	25	15	14	16.8
成美堂	17	16	17	17	23	18.0
南雲堂	21	26	23	20	38	25.6
マクミランランゲージハウス	32	35	23	27	39	31.2

南雲堂ならびにマクミランランゲージハウス両社の刊行部数が、他社と比べて、群を抜いている点を除けば、各出版社ともに、年間の刊行数についてはほぼ横ばいの状態ということができよう。また、2002年度の松柏社、2004年度の成美堂、南雲堂およびマクミランランゲージハウス各社の伸びが際立ちを見せているのが、特徴といえるであろう。

刊行数はそれぞれの出版社の企画力・営業力の反映と見ることができるが、執筆者の発掘と確保、ならびに、企画の新機軸の提案という点から見た場合、各社ともに頭打ちである現状に鑑みれば、上記4社の奮闘ぶりは特筆すべきものであろう。ただ、刊行点数が多いということは、それだけテキスト採用の可能性をみずからせばめることになり、テキスト自体の寿命を短くするという懸念を生じさせる。そのため、執筆者側としても、いきおい、同種類の趣旨のテキストを「再生産」することになりかねず、「粗製濫造」の悪循環を招くことにもなりかねないことを指摘しておこう。

次に、分野別の刊行数の推移を見てみることにしよう。⁷

表 3 分野別刊行数の推移

	2000	2001	2002	2003	2004	平均
総刊行数	153	163	145	132	162	151.0
総合	48	43	51	40	55	47.4
講読・リーディング	44	48	31	22	29	34.8
リスニング・LL	19	22	20	20	17	19.6
作文・ライティング	10	13	15	11	21	14.0
会話・スピーキング	12	12	19	15	23	16.2
文法	2	4	3	13	11	6.5
時事	17	16	14	16	18	16.2
ビデオ	16	15	14	12	7	12.8
資格 (TOEIC)	7	14	24	17	21	16.6
その他	8	4	2	4	10	5.6

ここで見られる一般的な傾向は、以下のようにまとめることができよう。

「総合」系テキストは全体の約 1 / 3 を占める。

「講読・リーディング」系テキストはやや減少傾向にある。

「リスニング・LL」系テキストはほぼ横ばい傾向にある。

「作文・ライティング」系テキストはやや増加傾向にある。

「会話・スピーキング」系テキストはやや増加傾向にある。

「文法」系テキストはやや増加傾向にある。

「時事」系テキストはほぼ横ばい傾向にある。

「ビデオ」系テキストは減少傾向にある。

「資格」系テキストはやや増加傾向にある。

「その他」に属するものはやや増加傾向にある。

それぞれの項目について、もうすこし詳しく解説・分析してみよう。

については、リーディングやリスニングなどの要素を加味した形で、かつ、いくつかの練習問題を配したものがこのグループのなかに含まれている。4 技能のバランスのとれた養成という点からも、総合テキストとして 1 冊でまかなえる利点は大きく、この形式のテキストは今後も増加していくことが予想される。

では、文字情報のみからなる純粋な「講読」のテキストはあきらかに減少傾向を示している一方で、リーディングスキルを養うテキストは増加の一

途をたどっていて、2004年の微増に反映している。

については、決定版といえるテキストの作成が待たれて久しいなかで、需要は必ずある一方で、複数年度にわたっての使用となると、担当者側の慣れから生じる「飽き」を招くこともあり、単年度毎に一定数の刊行が求められる分野である。

については、「作文」のテキストは、リーディングやリスニングのテキストとは趣が異なり、複数年度にわたって使用されることが多いとされてきた。そのため、出版社側も新規テキストを刊行する必要性が比較的少なく、横ばい状態が続いていた。しかし、ここ数年、パラグラフ・ライティングを教授する需要が高まり、ライティングスキルの養成を目指すテキストが多く刊行されるようになって、増加傾向が高まった。

では、単なる「英会話」のクラスから、プレゼンテーション能力やディベート能力の養成を目指すクラスの需要が高まってきたため、増加傾向を見せている。

については、「作文」の場合と同様に、刊行数は限定されているが、ここ数年、いわゆる、「再入門」的な基礎レベルの文法を扱うテキストが数多く出版されつつある。これは、よく指摘されるように、最近の大学生の基礎的英語学力の低下を示す顕著な例の1つということができよう。

については、一定数の「時事もの」のシリーズを刊行している出版社は多いが、素材のもつ鮮度が複数年度にわたっての使用を制限しかねないこともあり、必要最低限の刊行数にとどまり、横ばい状態のままである。

については、視覚に訴える教材として、「ビデオ」テキストは人気が高いにもかかわらず、制作費がかさむなどの理由から、制作が差し控えられる傾向にあると思われる。

では、扱うテーマ・素材が同じにならざるをえないので、比較的類似したものが多く刊行され、差異化が図られにくいという難点が挙げられる。実際のコミュニケーション活動能力を測定する「TOEIC」に人気が集ましつつある現状に鑑み、内容については、「英検」よりも「TOEIC」関連のテキストが多く刊行されている。

において注目すべき点は、基礎レベルのテキストが増加しつつあること

と、最近になって、自学自習用教材やCALL教材が刊行されたことを挙げる
ことができる。(なお、年度別各出版社出版物の詳細な内訳については、付
録の別表 1 ～ 5 を参照のこと。)

次節では、上記の大学英語教科書の出版業界の状況を踏まえ、同志社大学
において、出版社毎に複数年度にわたって、一定数の担当者に採用されたテ
キストを調査し、テキストの内容と採用理由との因果関係を探ることにする。

・同志社大学における英語教科書の使用実態

同志社大学における英語教科書の使用実態を探るために、まず、複数年度
にわたって、複数担当者（5 名以上）によって重複採用されたテキストの一
覧を提示してみよう。⁸（各タイトルのあとの括弧内の数字は採用者の数のべ
数を表す。）

表 4 出版社別重複採用テキスト一覧
（複数年度かつ 5 名以上の重複採用）

- 朝日出版社：*American Dream* (9); *An Amazing 100 Years* (5); *English for Global Age with CNN International* (5); *Hollywood 2* (5)
- 英 潮 社：*Culture Through Movies* (7)
- 英 宝 社：*Reading TIME* (17); *Tuning In To English* (11); *Language and Gender* (8); *British Cultural Identities* (7); *Danger in Daily Life* (6); *Art and Popular Taste* (5); *Introduction to Peace Studies* (5); *Music of the Heart* (5)
- 金 星 堂：*BBC World: Understanding the News in English* (9); *Exploring Hidden Culture* (9); *ABC World News 2* (8); *ABC World News 4* (8); *Here and There: Cultural Difference between Japan and Britain* (7); *Listen to the Voices of the World* (6); *New Understandings* (6); *Taking Sides* (6); *The World of the 20th Century* (6); *Issues of Global Concern* (5); *ABC World News 3* (5); *Man Watching* (5); *Science, Technology and Society* (5); *Snapshot USA* (5)
- 三 修 社：*English Across Culture* (6); *Views for Tomorrow 2002/2003* (6); *Reading Communicator* (5); *UK Made Easy* (5)
- 松 柏 社：*Topics for Today Book 2 An Advanced Reading Skills Text* (16); *Communication and Culture 4th Edition* (14); *Intermediate Listening Comprehension <Japan Edition>* (10); *An Introduction to American Studies* (8); *Cause & Effect*

3rd Edition (8); *Hot Topics: From Reading to TV News Listening* (8); *Issues for Today* (8); *Time and Newsweek Look at the Japan's Crises* (6); *How to Deal with Difficult People* (5); *Language: The Basics* (5)

成 美 堂 : *Ethic People Shaping the 21st Century* (13); *The Human Animal* (7); *Current English 2002/2003* (6); *Progress in Our World* (6); *The Global Community* (6); *Environment and Health* (5); *In Touch with American Ads* (5)

南 雲 堂 : *Different Realities* (6)

マクミラン : *The Powerful Reader 2nd Edition* (17); *Speaking of Speech* (10: native 8); *Our World* (1); *Protecting the Environment* (8); *Wonderful USA* (8); *Ideas and Issues Intermediate* (7: native 4); *People Are Funny Looking at National Characteristics* (7); *Fish in Water* (5); *The Story of American Popular Music* (5); *Understanding Movies* (5)

また、2000年度から2003年度までの総刊行数と同志社大学における5名以上の重複採用テキスト数を比較すると、次の表5・6のとおりとなる。

表5 総刊行数の順位

1	マクミラン	: 117
2	南 雲 堂	: 90
3	松 柏 社	: 70
4	金 星 堂	: 67
4	成 美 堂	: 67
6	朝日出版社	: 61
7	三 修 社	: 49
8	英 宝 社	: 44
9	英 潮 社	: 28

表6 重複採用テキスト数の順位

1	金 星 堂	: 13
2	松 柏 社	: 10
3	マクミラン	: 9
4	英 宝 社	: 8
4	英 潮 社	: 8
6	成 美 堂	: 7
7	朝日出版社	: 4
7	三 修 社	: 4
9	南 雲 堂	: 1 (点)

上の表の比較から、大変興味深い事実が浮かび上がってくる。同志社大学におけるテキストの重複採用は、必ずしも、各社の総刊行数に比例して現れるわけではないことはあきらかであろう。重複採用テキスト数について、総刊行数との比率からして、マクミラン・松柏社が上位を占めるのは、ある程度当然のこととして、金星堂の1位は注目に値する。また、刊行数では下位の英宝社や英潮社の奮闘ぶりも見逃せない。一方、南雲堂の場合は、総刊行

数で2位につけながらも、重複採用では最下位に甘んじている。15年ほど前には、多くの採用が見られた出版社であるが、最近の経営戦略として、おそらく、同志社大学レベルではなく、中堅・下位校をターゲットとする方向へ転換したものと推察される。

次に、表7に示すように、各出版社におけるいくつかの上位重複採用テキストを取り上げ、各出版社発行のそれぞれの『出版目録』を適宜参照して作成した、重複採用テキストの概要を紹介することで、それぞれの出版社のもつ出版方針、すなわち、「独自色」を浮かび上がらせ、それにともない、本学の英語カリキュラムとの関連性について論じてみよう。

表7 各出版社別の主な重複採用テキストの概要一覧

【朝日出版社】

American Dream (9)

米ドキュメントTV番組からアメリカ文化を紹介する12のトピックを集めたビデオ教材で、「アメリカの食文化」、「ウォルト・ディズニーの生い立ち」、「初の黒人プロ野球選手誕生」など学生の興味を引くトピックからなり、出演者のコメントを含む豊富な映像が特長である。また、ビデオは英文字幕スーパー入りとスーパーなしを各課併録している点も、担当者に好評の一因であったと思われる。

【英潮社】

Culture Through Movies (7)

映画の多大な影響力、特に英米の映画のもつ異文化的意義に重点を置いた読解用テキストで、60以上の名作や話題作を取り上げ、たとえば、西部開拓時代、原発事故、ベトナム戦争、イギリス階級社会、家族、人種、性差別、環境、社会正義などテーマを論じている点で、読解力の養成だけでなく、アメリカ・イギリスの異文化理解に役立つものである。各章末にあるTrue or FalseとGap-Filling問題もまた、授業に変化をもたせることに貢献したと考えられる。

【英宝社】

Reading TIME (17)

他社からも数多くの「時事もの」が出版されているが、英語としてのレベル・内容ともに定評のある、米国のニュース週刊誌『タイム』から題材を収集し、安楽死、遺伝子、性犯罪、ごみ、医療事故、地球温暖化、銃暴力などの現代的問題を扱った点が、高い評価を集めたものと思われる。

Language and Gender (8)

「ことばに潜む差別」という、非常に微妙ではあるが、日常生活で避けて通れない話題を正面から論じた同名原書からの抜粋で、言語に関する基本的な問題から「ことばとジェンダー」についてまで、幅広く考えさせる内容の本である。伝統的な「講読」系テキストの出版に実績があり、着実な読解力を目指す「英語講読」や「イングリッシュ・セミナー」にふさわしいと判断されたのであろう。

【金星堂】

BBC World: Understanding the News in English (9)

同社は、人気のABC World Newsシリーズとともに、「時事もの」に実績を有し、本書は、BBCワールドニュースプログラムを15本精選し、ビデオ教材として編集したものである。日本人学習者のために綿密な工夫が施された練習問題と本物のニュース音声を収録した付属CDによって、視聴覚教材としての有用性が高く評価されたのであろう。

【松柏社】

Topics for Today Book 2 An Advanced Reading Skills Text (16)

Communication and Culture 4th Edition (14)

両書は、ともに、リーディングスキルを向上させるために開発されたテキストであるが、同社のテキスト編集方針は、日本の大学生向けに総合教材として再編集された、あるいは、ESLの専門家によって書き下ろされたテキストを用いて、ESLの現場で検証を重ねた演習問題と学習者の興味を引く題材によって、4技能の総合的なスキルを高める点に重きが置かれている。単なる講読ではなく、スキル重視によるダイナミックな授業展開にふさわしいと見なされた結果の採用であらう。

【成美堂】

Ethic People Shaping the 21st Century (13)

同社は、テキスト制作にあたっては、モニター制度を採用し、堅実な制作方針を貫いている。本書は、民族、地図、宗教、歴史をキーワードに、今世紀の世界の動向を見据えるための比較文化論として、学生の知的興味を引くものと判断され、採用されたのであろう。

【マクミランランゲージハウス】

The Powerful Reader 2nd Edition (17)

経験豊富なESL教材ライターが日本人学習者のために書き下ろしたリーディングスキル教材で、バラエティに富んだトピックと適切なレベルにコントロールされた英文、ストラテジー中心の体系的な演習内容というように、学習者および教授者の両方にとっての使いやすさが好評の理由と思われる。

Speaking of Speech (10 : native 8を含む)

Ideas and Issues Intermediate (7 : native 4を含む)

ともに、ネイティブ・スピーカー教員による採用が多く、興味深い題材と平易な英語とユニークなイラストを含む学習者参加型の学習方法を採用している点が、スピ

ーチコミュニケーション能力、あるいは、プレゼンテーション能力の育成に有用と判断されたものと思われる。

Our World (1): Protecting the Environment (8)

本書は、地球温暖化、生態系の危機と種の消滅、環境ホルモンの拡散、化学物質汚染、海洋汚染、人口爆発、原子力事故など、英米の著名雑誌に掲載された環境問題関連の記事をやさしくリライトしたものであるが、「イングリッシュ・セミナー」の「自然」用テキストとして、好適と判断されたのであろう。

付録の別表1～5に示されているように、各社ともに各年度にあらゆるジャンルにわたって出版努力がなされてきているけれども、表6の同志社大学における重複採用の結果と、表7に示したそのテキストの概要を詳細に分析してみれば、どの分野を重点的に補強し、展開していくかといった、各出版社の出版戦略とも呼べるような独自の方針が浮かび上がってくる。

たとえば、朝日出版社は、当初から、「時事」系や「ビデオ」系テキストに強く、重複採用テキストにもその傾向が顕著である。次に、英宝社は、従来から、やや硬い内容の講読系テキストに実績を残してきたが、リストのなかにも、この種のテキストが数多く含まれている。また、金星堂は、幅広いジャンルのテキスト発刊を手がけ、かつ、重複採用テキストにもその傾向が如実に反映されているなかで、とりわけ、ニュース関連の「時事もの」に強みを見せている。さらに、松柏社は、最近では、ELSの教育・研究実績に裏打ちされた編集方針によって、4技能の総合的なスキルの向上を企図したテキスト発刊を特長としている。同様に、マクミランランゲージハウスでは、海外の第2言語教育テキストの出版実績を背景に、多彩なジャンルに進出し、リストからも広範な支持を集めていることが読み取ることができる。

このように、同志社大学における重複採用テキストの実態から各社の出版傾向があきらかになるであろう。つまり、同志社大学における重複採用テキストで上位にランクされているものは、各社ともに、その年度の最重点テキストであり、おそらく、他大学でも採用の多かったものと推察される。当該のテキストが、その内容・レベルともに、同志社大学での採用に際して比較的高い評価を得たことは、各社の出版戦略とあいまって、現行英語カリキュラムとの強い相関関係を示すものと見なすことができよう。⁹

他方、南雲堂の場合のように、重複採用テキストとしてはほとんどリストアップされていないという事実は、その刊行数の多さとは裏腹に、レベルの点で完全に「易化傾向」にシフトしたことを物語っている。刊行数と重複採用数が相反するものであるが、これは、「基礎レベル」や「再入門レベル」のテキスト刊行という形となって現れた結果であり、同社の出版傾向と同志社大学における重複採用テキストとの関係において、反比例という相関関係を示していることはきわめて興味深い。

各出版社は、それぞれの出版戦略のなかで、各大学の事情に鑑み、多様なジャンルや難易のものを刊行することが求められている。しかしながら、同志社大学での採用に限定した場合、1つの出版社ですべてのジャンルを包含することは、同志社大学の難易レベルと出版社の採算レベルがうまく合致しない現実と照らし合わせても、ほぼ不可能であると考えられる。また、各出版社も実績を有するジャンルにはさらなる拡充を図っていくことは当然であろうが、一方で、新規ジャンルの開拓については、採算を考えて、市場の大きい中堅・下位校をターゲットに触手を伸ばしてくることは十分予想される。

本稿の分析を通じて、各出版社の出版方針、すなわち、テキストの企画から執筆者選定、さらに編集作業にいたるまで、当該の出版社がもつ出版全般に関わるノウハウのうち、特に、テキストのジャンルと難易度を同定することこそが、今後、本学において統一テキストを採用する場合の1つの指針となりえるものであろうし、また、第2部会専任教員が統一テキストを作成するにあたって、ジャンル別の出版実績を勘案したうえで、出版折衝の際の判断材料となりえるであろう。

．おわりに

本稿では、言文センター設立当時からの英語カリキュラムの変遷を詳述し、現行カリキュラムにおける英語教科書の位置づけを、過去数カ年にわたり、大学英語教科書出版業界の状況分析と本学における重複採用テキストの実態調査を通じて、多角的に検討を加え、各出版社の出版戦略と本学における重複採用テキストとの間に強い相関関係が見られることを指摘した。

言文センターが発足して10年をすでに越えている今、内外から発せられる外国語教育に対する切実な要請に応えるためには、外国語カリキュラムの充実・発展こそが、いわば、生命線であり、しかも、教育・研究の両面において、今までにもまして厳正な自己点検・自己評価が必要となってくるのはいうまでもない。その意味で、大学英語教科書に関する本稿の調査・分析が、今後の英語カリキュラムの見直しや統一テキストの作成にあたっての一助となりうることを願ってやまない。

注

* 本稿を執筆するにあたり、言文センター事務室の那須淳子さん、福島直子さん、ならびに奥村真由子さんには、多忙な教務事務のなか、基本データの提出・整理などで多大なご協力をいただき、ここに記して、感謝を申し上げたい。

1 ここでいう「旧英語カリキュラム」の歴史的な変遷については、若干の補足が必要であろう。旧英語カリキュラムで使用されていた個々の科目名は、古くは1958年度まで遡る。(1956年度・1957年度の資料が散逸しているため、1958年度の資料に拠らなければならないが、1956年度・1957年度は、総合英語・選修英語という名称が当てられていた。それ以前は、英語I・II・III・IVという名称が用いられ、英語IVでは、講読、英作文、英会話が設置されていた。)1958年度当時は、英語A(訳読)・英語B(訳読)・英語C(文法・作文)・英語D・E・F(選修科目として、講読・作文・会話などに細分)というように分類されていた。後に、英文学科のカリキュラムとの整合性などの理由から、1964年度に、英語B(精読)・英語C(速読)・英語D(訳読)・英語E(英会話・講読・英作文・英文法・オーディオ英語)に名称変更された。1983年度には、英語Cの内容・種目が「多読」と変更されたが、翌年の1984年度までは、基本的にこれらの名称、内容・種目が踏襲された。1985年度には、科目名が英語A・B・C・Dに戻されたが、内容・種目には変更はなく、旧名称の英語B・C・D・Eのものがそのまま平行的に移されたものであった。1989年度には、英語A・B・Cの内容・種目に変更があり、それぞれ、講読(Stories)、講読(Essays)、講読(A・Bをふまえた小説、評論、その他)と定められた。1990年度からは、英語E(特講-英語文化事情)と英語F(特講-現代英語表現法)が開講された。(なお、個々の情報は、同志社大学が各年度に発行する『履修要項』などに拠った。)

2 今回のカリキュラム改訂にともなって、テキスト選定の運用面でも、従来の方針を大きく変更することになった。以前は、英語専任者会議の下に「テキスト委

員会」が作られ、次年度のテキストについて、旧刊・新刊を問わず、専任教員から推薦のあったものをその内容ならびに難易度から各科目に割り振り、作成された推薦テキストリストに基づいて、教科書選定をおこなってきた。新英語カリキュラムでは、カリキュラム運用の自由度を確保し、講義概要の執筆を各担当者に依頼するようになったことから、テキスト選定にあたっては、各担当者の自由裁量に任せることとなった。

3 1998年度からは、半期週1回で提供される「イングリッシュ・ワークショップ1・2」の新たなヴァリエーションとして、リスニングコースに限定して、半期完結型として同一担当者による週2回の「イングリッシュ・ワークショップ3」が提供されることとなり、また、翌年の1999年以降には、同様の授業運営形態で、「イングリッシュ・セミナー3」が提供されることとなった。

4 経済学部では、当時、学部としてのカリキュラムの見直しが進行中であり、外国語科目についても、言文センターに協力依頼があり、経済学部生クラスでは、以下のような変更がおこなわれることとなった。

英語科目を4・5講時に設置する。

「英語文化事情」に関しては、入学時のプレースメントテストの成績によって、習熟度別クラス編成とする。

「英語講読」については、30名定員とする。

「イングリッシュ・セミナー」「イングリッシュ・ワークショップ」は、春学期で終了し、秋学期にはクラス定員を半減し、2単位科目として、少人数集中型による「英語演習」を提供する。

5 2003年度には、「英語文化事情1・2」において、商学部が選択制から学部指定制に変更し、習熟度別クラス編成も導入した。また、2004年度においては、新設学部の政策学部が、「英語文化事情1・2」において、商学部と同様に、学部指定制かつ習熟度別クラス編成を採用し、「英語講読1・2」においても同様の扱いとした。

6 具体的なデータは、大学英語教科書協会が発行する『大学英語教科書のご案内』、同協会のホームページ（<http://www.daieikyo.jp>）ならびに、各出版社発行の新刊案内を参照し、集計したものにに基づいている。なお、諸般の事情から、刊行が遅れ、複数年度にわたって出版案内されているものについては、当然のことながら、最新刊の年度においてカウントした。

7 ここでの刊行数については、たとえば、1冊で「総合」と「リスニング」の要素を兼ね備えているものもあるため、それらをすべて含めてカウントした。

8 ここでの調査・集計は、2004年度の採用テキスト情報が論文執筆時には未確定であったため、2000年度～2003年度の4カ年を対象として実施したことを断っておく。

9 本稿では収録されていない鶴見書店（音羽書房鶴見書店）に関しても、刊行数

は少ないけれども、たとえば、*Back to the Basics* (8); *Fundamentals* (8); *A Revolution in Ideas* (7); *Journalism English Today* (5); *UK Report Today* (5)のように、内容的に読みごたえがあり、学生の知的好奇心を喚起しうると判断されたものが重複採用されているという事実は、テキストの内容・レベルとカリキュラムとの関連性を考察するうえでの1つの根拠となるであろう。

参考文献

- 同志社大学言語文化教育研究センター自己点検・自己評価編集委員会. 1994. 『自己点検・自己評価報告(1) - 1993年度外国語・言語文化教育を中心に - 』京都：同志社大学言語文化教育研究センター.
- 西納春雄. 2001. 「2002年度カリキュラムについて(お知らせ)」(2001年9月5日付英語担当者への配布文書)
- 西納春雄. 2001. 「英語カリキュラム改訂について(お知らせ)」(2001年11月27日付英語担当者への配布文書)
- 山内信幸. 1993. 「同志社大学における外国語カリキュラムの改革 英語を中心として」『大学時報』Vol. 42, No. 229, pp. 30-33.

付 録

別表 1 2000 年度各出版社出版物の内訳

	総発行数	総合	講読・ リーディング	リスニング・ LL	作文・ ライティング	会話・ スピーキング	文法	時事	ビデオ	資格 (TOEIC)	その他
合 計	153	48	44	19	10	12	2	17	16	7	8
朝日出版社	14	4	1	0	1	1	0	2	6	0	0
英潮社	6	1	4	1	0	0	0	0	0	0	0
英宝社	14	1	6	3	1	1	0	0	1	0	1
金星堂	18	3	7	2	2	2	0	4	2	0	1
三修社	15	8	4	3	0	0	0	1	0	1	1
松柏社	16	7	7	2	0	0	0	2	1	0	1
成美堂	17	4	5	1	1	0	0	2	2	2	1
南雲堂	21	7	1	5	2	1	2	1	0	4	2
マクミランランゲージハウス	32	13	9	2	3	7	0	5	4	0	1

別表 2 2001 年度各出版社出版物の内訳

	総発行数	総合	講読・ リーディング	リスニング・ LL	作文・ ライティング	会話・ スピーキング	文法	時事	ビデオ	資格 (TOEIC)	その他
合 計	163	43	48	22	13	12	4	16	15	14	4
朝日出版社	19	4	3	2	0	2	0	4	5	1	2
英潮社	9	1	3	2	0	2	0	2	0	0	0
英宝社	14	1	8	1	1	0	0	0	0	2	1
金星堂	19	6	8	3	4	0	0	3	3	2	0
三修社	11	5	3	0	2	2	1	1	0	1	0
松柏社	14	2	7	3	1	0	0	2	1	1	0
成美堂	16	6	4	2	1	0	0	1	1	1	0
南雲堂	26	12	3	3	2	1	1	0	2	3	1
マクミランランゲージハウス	35	6	9	6	2	5	2	3	3	3	0

別表 3 2002 年度各出版社出版物の内訳

	総発行数	総合	講読・ リーディング	リスニング・ LL	作文・ ライティング	会話・ スピーキング	文法	時事	ビデオ	資格 (TOEIC)	その他
合 計	145	51	31	20	15	19	3	14	14	24	2
朝日出版社	15	4	3	4	3	1	0	3	3	1	0
英潮社	9	2	1	0	2	2	2	1	0	2	0
英宝社	7	2	4	0	1	0	0	1	0	1	0
金星堂	15	6	5	1	1	2	0	3	3	1	0
三修社	11	8	3	0	1	0	0	1	1	1	0
松柏社	25	7	5	4	1	3	0	1	1	8	1
成美堂	17	6	2	4	1	1	1	2	3	2	0
南雲堂	23	8	3	3	4	4	0	0	0	4	1
マクミランランゲージハウス	23	8	5	4	1	5	0	2	3	4	0

別表 4 2003 年度各出版社出版物の内訳

	総発行数	総 合	読 読・ リーディング	リスニング・ LL	作 文・ ライティング	会 話・ スピーキング	文 法	時 事	ビ デ オ	資 格 (TOEIC)	そ の 他
合 計	132	40	22	20	11	15	13	16	12	17	4
朝 日 出 版 社	13	3	3	0	1	2	2	2	4	1	0
英 潮 社	4	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0
英 宝 社	9	3	1	2	1	0	2	1	1	3	0
金 星 堂	15	4	2	2	1	1	0	5	3	2	1
三 修 社	12	6	2	2	0	1	0	1	0	2	0
松 柏 社	15	4	3	3	2	2	1	2	1	2	0
成 美 堂	17	9	3	2	0	1	1	3	2	3	1
南 雲 堂	20	5	3	5	2	1	4	0	0	2	0
マクミランランゲージハウス	27	5	4	4	4	4	3	2	1	2	2

別表 5 2004 年度各出版社出版物の内訳

	総発行数	総 合	読 読・ リーディング	リスニング・ LL	作 文・ ライティング	会 話・ スピーキング	文 法	時 事	ビ デ オ	資 格 (TOEIC)	そ の 他
合 計	162	55	29	17	21	23	11	18	7	21	10
朝 日 出 版 社	12	2	1	0	0	1	2	3	1	4	0
英 潮 社	5	1	1	0	0	3	0	0	0	1	0
英 宝 社	10	2	2	2	2	1	0	1	0	1	0
金 星 堂	13	5	5	1	1	0	1	4	2	2	0
三 修 社	8	3	0	1	2	0	0	1	0	1	1
松 柏 社	14	4	4	1	1	2	2	2	1	0	0
成 美 堂	23	11	7	3	0	0	0	2	1	6	1
南 雲 堂	38	11	9	5	5	4	4	1	0	4	6
マクミランランゲージハウス	39	16	5	4	5	12	2	4	2	2	2

Analysis of the Tendencies and Trends of University English Textbooks: With Special Reference to the Curriculum of Doshisha University

Nobuyuki YAMAUCHI

Key words: university English textbook, curriculum development, Doshisha University

This study aims to analyze the general tendencies of university English textbooks published in Japan for the future curriculum development in the Second Division (English Division) of the Institute for Language and Culture in Doshisha University. It especially focuses on the inter-relationships between the number published and the number adopted, with special reference to the case study of Doshisha University.

First of all, a historical survey is presented of the curriculum development of English from 1993 to the present. In the light of the outline of the curriculum, its content, the division of the courses in each subject, the class number offered, the description of the syllabi and so on, we can see the most drastic curriculum reform for the last 10 years in 1993, which is interestingly marked as the inaugural year of the Institute; and we also find minor development in 2002.

Next, an analysis is offered of the general tendencies of university English textbooks published in Japan for the last 5 years, according to their publishers and genres of content.

Lastly, attention is focused on the qualitative and quantitative analysis of textbooks repeatedly adopted by more than 4 instructors in Doshisha University over the last 4 years, which will reveal that some characteristics of the repeatedly adopted textbooks clearly reflect the publishing strategies

of respective publishers.

It is hoped that this survey and analysis will make a substantial contribution to future curriculum development in the English Division, and help to enhance our educational awareness as language instructors.